

2010-2012年度の教育普及事業

当館の教育普及事業のねらいは、第一には館の使命である「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」や「子どもたちとともに、成長する美術館」に基づいて、来館者が生き生きと過ごせることであり、さまざまなプログラムを通して鑑賞や表現、交流の機会を設けつつ「美術館の日常化」と「日常の美術館化」を目指すものである。美術館での経験を通じた新たな価値観の発見や考え方の転換、表現方法の獲得などのことは、人生観やライフスタイルそのものを形作ってゆくことでもあり、教育普及事業はすなわち自立した人格づくりの活動だともいえる。ただしその成果が目に見えてくるには時間のかかることでもある。各年度の事業は、継続的に行うものと、その年度ならではの活動を組み合わせて進めているが、ここでは主に継続的な活動の中から取り上げて紹介する。

アートライブラリー・プログラム

「絵本を読もう」

～幼児と大人が共に過ごす美術館

2007年より継続している、アートライブラリー担当のライブラリアンが展覧会担当キュレーターやエドゥケーターと共同で行うプログラム。ライブラリアンによる絵本の読み聞かせやわらべうたなどの時間と、展覧会の作品鑑賞や美術館内散歩、造形活動などを組み合わせた内容で、幼児と保護者を主な対象に想定して30-40分間程度で完結するよう組み立てている。参加者たちはまず、読み聞かせを通じて絵本の世界そのものに浸る。そしてその余韻をふまえて作品に出会う。ここでは読み聞かせという美術館への入口を通じて、小さな子ども連れで来館することへの保護者の抵抗感を少なくし、幼年時代の子どもたちにとっても美術館が楽しい経験の場所となることを目的としている。

キッズスタジオ・プログラム

「すくすくステーション」

～はじめての「親子で美術館」

2010年度より継続している平日のプログラム。火曜・木曜午前のスタジオを開放し、乳幼児の散歩コースの中でも気軽に美術館に親しんで欲しいというねらいで運営している。近隣在住の親子の利用のほか、旅行や観光の家族連れによる利用もある。「ハンズオン・まるびい!」のプレイルームの運営の蓄積から、乳幼児が自分で遊べるブロックなどの遊具やちぎり絵などの簡単な造形の準備も整えており、家庭では避けられがちな大きな紙へのドローイングや、ハサミへの初挑戦など、平日のゆったりとした時間をそれぞれの思いで過ごしている。

キッズスタジオ・プログラム

「ハンズオン・まるびい!」

～見つける、感じる、作る場所

2007年度から継続しているキッズスタジオの休日プログラム。造形や鑑賞のプログラムを展覧会や季節に沿ったテーマで用意し、ワークショップとプレイルームの2つの運営形式がある。ワークショップでは日時と定員を決めて事前募集を行い、主題を絞り込んでじっくりと鑑賞や造形の活動を行う。プレイルームは午後1時～4時の間に自由に滞在でき、テーマを設けた造形コーナーや日用品を使ったユニット造形などを選んで過ごす。プレイルームは年齢制限は設けず、幼児から大人まで参加可能で、家族単位の利用を想定し、小学生低学年を中心とした子どもたちが自由に素材や用具を使って表現ができる一方で、大人も同様に自分なりの表現に取り組んでいる。参加者作品は積極的にスタジオに展示しており、何が心に残ったか、何を想像したかという思いの多様さを見ることが出来る。素材や用具は家庭でも実現できる

ものを取り入れ、作る大きさや展示の仕方ではスタジオの広さを活かしたり、特に共同制作のスタイルをとるなどし、美術館と家庭を繋いで「美術館の日常化」「日常の美術館化」となることを目指している。

「ミュージアム・クルーズ」

～小学4年生と地域の大人との鑑賞活動

2006年度より継続する小学校との連携活動で、市内の小学4年生を学校単位で招待し、コレクション展のグループ鑑賞を中心に過ごすもの。この事業の継続性には大きく2つの面があり、ひとつは小学4年生という時期に美術館で作品に出会い、見つけたことや想像したことを仲間と伝え合う体験を持った人たちを地域に生み続けていることである。参加児童に配布するガイドマップにはその年度中に展覧会を無料で観られる「もう一回券」が付いており、「美術館の日常化」へと誘うツールの意義もある。

もう一つは、このプログラムにより毎年地域の大人たちに向けて、子どもたちとともに作品と出会う場を開き続けていることだ。鑑賞ボランティア「クルーズ・クルー」のメンバーは数ヶ月の活動を通じて小学生とともに作品と出会う体験を繰り返す。これは地域の財産であるコレクション作品に何度も触れる経験を持った人たち、いくなれば作品の味方となる市民を増やしていく活動でもあり、その活動の様子はまさに「美術館の日常化」の光景といえる。

中学生まるびいアートスクール ～中学生の今と10年後のための時間

2011年度より継続している、中学生を対象とした学校連携プログラム。中学校と美術館が継続的に交わる場をなかなか持てない状況（特に授業時間を利用した来館が困難である）が課題となる中、課外活動の時間を活用して、美術館で中学生と教員とアーティストと共同でのワークショップを行うというスタイルで実現したのが「中学生まるびいアートスクール」である。金沢市中学校文化連盟の共催を得ることで毎年3校の推薦を得て、顧問教諭と相談の上で3校合同による5回のワークショップを行う。この講師には中学校教員の経験を持ち、現在は京都造形芸術大学で教鞭をとる現代美術家の椿昇に依頼した。椿は、中学生たちが自分の思いを表現できるようにと、パートナーとしてシロクマ姿の頭を持つ「シロくま先生」を指名した。彼は京都造形芸術大学で講座を持つワークショップのエキスパートであり、人でない姿の存在が中学生が心を開くために必要なだと椿が呼んだものだ。1年目の全5回のワークショップは「魔法のひきだし」と題し、中学生たちは道端に捨てられていたゴミと古着のTシャツ使って格好良いシャツを生み出すなど、活動は今後の身の回りのものの見方を問い直すような経験となり、それは「日常の美術館化」というにふさわしいものとなった。また2年目となる2012年度は「魔法の書道展」と題して、自分の思いを言葉にして、それをラップ音楽の歌詞や手作りの筆による書などの形で表した。そしてこのプログラムでは、自分の作品を仲間に発表するだけでなく展覧会を作ることで大勢の人に作品が観られる場も作った。それらの活動内容をまとめた記録集は、中学生たちが10年後にも読み返して人生を生き抜くヒントとなるべくまとめられ、参加者に贈ったほか、市内中学等に配布した。

おわりに 今後に向けて

この2010-2012年度の間には、以前から継続している事業に加えて、それまで対応の少なかった年代に向けての事業を新たに行った。平日の乳幼児連れのファミリーに向けた「すすくステーション」や中学校と連携しての「中学生まるびいアートスクール」がそれに当たる。休日に継続している子どもとファミリーを対象に行う「ハンズオン・まるびい!」「絵本を読もう」、小学校との連携である「ミュージアム・クルーズ」も引き続き行っている。一般層に向けた活動では、30代までの年代に向けた「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」事業を継続し、シニア世代も含めたものでは「ミュージアム・クルーズ」のクルーズ・クルーや、「アートモール・スクール・プロジェクト」などで、来館者の作品体験を深める活動を行っている。

「美術館の日常化」につながるプログラムを様々な形式で行いつつも、不足しているのが高校生など10代後半の世代に向けた活動であろう。個人に向けても学校連携という形でも、なんらかの形で充実させたい。開館5年を過ぎてふり返ると、さまざまな形で美術館プログラムへの参加経験を重ねてきた人々もあり、そのような人々と新しく美術館を訪れる人々が共に心豊かにある場をどのように広げていけるかが、まちとともに生きる美術館として次に必要な取り組みといえるだろう。

(木村 健 / エデュケーター)